発熱した時に受ける検査

日本臨床検査医会
松野　容子

●発熱を的確にとらえるには

発熱は体の変調（とくに炎症の存在）を知らせる重要なサインの一つです。"熱っぽい"と感じたら、各家庭でも体温計を用いて簡単に計ることができます。最近では電子体温計や鼓膜式体温計などが普及し、検温時間も短縮する傾向にありますが、現在のところ、水銀体温計を用いて脇下で一〇分間測定した値が、最も信頼のおける体温とされています。

熱の高さは体の炎症の強さを反映します。普通三十七℃以上を発熱としますが、小児や女性の月経開始前二週間は健康でも体温がやや高くなるため、三十七・五℃以上を発熱ととらえるのが一般的です。

また、高齢者やステロイド剤を長期服用している場合には発熱の症状は表れにくく、微熱（三十七・〇℃～三十七・九℃）であっても注意が必要です。このように発熱やその程度の判断には、年齢や月経周期、薬の服用などを考慮する必要があります。

●発熱の原因を調べる検査

発熱の原因となる疾患はさまざまです。最も頻度が高いのはかぜ症状を伴う短期間の発熱ですが、その多くは経過の良好なウイルス性疾患ですから、特別な検査や治療の対象となることはありません。

しかし、発熱を初期症状として、検査の結果、重篤な感染症や悪性腫瘍、膠原病などが発見される場合も稀ではありません。病院ではこのような隠れた重要な疾患を見逃さないように、発熱の程度や持続期間、付随する症状によって、必要な検査を行ないます。

まず、発熱の原因が感染症か否かを大まかに見分けるために、血液検査では白血球数、CRP（C反応性蛋白）、などを調べます。これらの異常から感染が疑われれば、感染部位や病原体を確認する目的で、胸部X線や検尿、培養検査（喀痰、尿、血液、便）、血清抗体価の測定などを行います。

近年、日本では結核が再び注目されるようになり、学校や医療施設などでの集団感染が問題となっています。結核の蔓延の怖さは、一連の咳とともに放出される数千個もの飛沫核（結核菌を含む一～五μmの微粒子）が空中に約三〇分間浮遊するという事実からも容易に想像できるでしょう。微熱とともに咳や痰が続くようであれば、結核をまず疑って積極的に検査を受けて下さい。従来の検査では結核菌を確認するのに四週間以上を要しましたが、最近では遺伝子検査など検査技術の向上によって、迅速な診断が可能になりつつあります。

この他、発熱の原因を調べるためにいろいろな検査が行われますが、それでも一部の発熱は原因不明（いわゆる不明熱）のことがあります。不登校の原因ともなる心因性発熱もその一つです。発熱は容易に自覚できる症状の一つですから、いつもと違う発熱と感じたら、早めに医師の診察を受けることが大切です。